

卒業にあたって

蓮池 薫



今春、わが母校、中央大学を卒業するにあたり、過去のこと感慨深く思い出されます。

1976年春から駿河台の校舎で学び、

78年春には多摩校舎に移って3か月あまりをすごした日々。そして北朝鮮に拉致されたのち、再び中央大学のキャンパスを踏んだのが2003年の春。そのとき大学挙げでの大歓迎に、うれしさとともに戸惑いすら感じたのが、昨日のことのようです。その後、子どもたちが帰国した2004年の秋に復学して、はや3年あまり、私は多くの方々のおかげで、中断を余儀なくされていた法律の勉強を続けることができました。

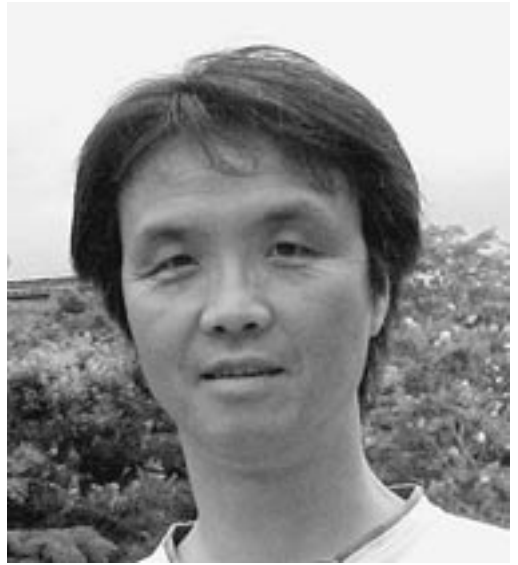
普通なら人生で4年という、そう長い期間しか関わらないはずの大学を、私は30年かかってようやく卒業することができました。

拉致された当時は「早く大学に戻って勉強しなければならぬ」と毎日悩み、また抗議もしました。しかし、しばらくすると、すべてを諦めました。そうしなければ、とても生きていけそうもなかったのです。ただ、諦めはしても忘れはしませんでした。駿河台校舎の狭い中庭の休講を知らせる掲示板、もっぱら安いカレーライスばかりを食べていた生協の食堂、週に一度のバレーボール授業に通っていた水道橋の理工学部校舎、広々としたキャンパスの多摩校舎など

など。戻ることはできなくても、何かにつけ思い出し懐かしがっていた風景です。その母校を再び目の当たりにできるのは、本当に夢にも思っていないませんでした。

帰国した私は、退学処分を避けるため、私の拉致後5年半にわたって両親が学費を払い続けてくれたことを知りました。そこには、息子に帰ってきてほしい、必ず帰ってくるという、あまりに切ない思いが込められていました。また、わが母校が、まだ拉致事件が疑惑に過ぎなかった段階にもかかわらず、私の生存を信じ、復学を認めてくれた事実も知りました。そこには、中大生を救おうという中大の皆さんの強い意思がこめられていました。そんな親や母校の思いに、私は、いつかは、必ず復学し法学の勉強を続けることで報いていこうと、心に決めました。また、拉致という、法とはまるで無縁な行為の犠牲者になった人間として、一体この世で法の力とは、何なのだろうかという疑問も、僕の背を後押しする理由のひとつでした。

法学の勉強はとても楽しかったです。20



卒業間近の蓮池薫さん (蓮池さん提供)

義から教科書の発送まで細かく手配してくださった法学部事務室の方々に心から感謝申し上げます。そしてこの日を待ち望んでいた両親にも、感謝の言葉を送るとともに、いち早く卒業証書を見せてあげたいと思います。

学んだ法学は、今後、私が日本の社会を見つめる新たな視角になり、仕事や生活をより有意義なものにしてくれるでしょう。そして、もうひとつ、これからは在校生としてではなく、中大OBとして堂々と、地元の白門会の集まりにも出られるようになりました。

歳のころには、見えなかった法の奥深さを垣間見ることができました。法学が条文の暗記ではなく、究極には人間を学び研究する学問であることも肌で感じることができました。

私の救出や復学に努力してくださった方々、ご多忙のなか、わざわざ柏崎まで向いて講義し、細かいアドバイスを長文のメールで送ってくださいました先生方、出張講

いま、私が卒業の喜びを感じている、この瞬間にも、ほかの多くの拉致被害者たちは帰還できません。彼らにも母校があり、やり残した勉強もあったはずですが、未帰還者の皆さんが1日も早く無事に帰国して成し遂げられなかった夢をかなえられる

よう、帰国した者として、できる限りのことをやっていきたいと思えます。同時に、この場を借りて、拉致事件が風化しないよう、今後ともご支援くださるよう、お願い申し上げます

重ねて私を応援してくださいました多くの大学関係者とともに、私どもの救出のため、多くの紙面を割いてきてくださった『Hakumon ちゅうおう』関係者の皆さんに、感謝の意を表します。本当に、ありがとうございました。



「勉強」に対する熱い思いと、ご両親はじめ関係者の方々に対する感謝の気持ち。『卒業にあたって』には蓮池薫さんのお人柄がにじむとともに、30年をかけてのご卒業の重さが伝わってきます。蓮池さん、手記をご快諾いただき、ありがとうございます。(編集室)

30年目の春の苦勞をしまでした

「温情」と「冷淡」と

——蓮池薫さん

救出運動の軌跡——

「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」

(現「復学した中大生蓮池薫さんを支える会」) 一同

- 初代代表幹事 重城拓也 (99年法・政卒、早稲田大学院生)
- 2代目代表幹事 南 竜也 (01年法・政卒、宮崎県議会派「愛みやざき」事務局長)
- 3代目代表幹事 渡部一実 (04年法・政卒、産経新聞記者)
- 4代目代表幹事 篠田吉央 (05年経・国際経済卒、岡山放送アナウンサー)

「救う会」結成から10年の歲月

中央大学に「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」が結成されたのが、1998年5月。それから10年の歲月が流れ、蓮池薫さんがご卒業される日を迎えられたことを

大変嬉しく思います。関係者のみなさま、おめでとうございます。ただ、「お祝い」気分浸ってばかりいるわけにはいきません。救出を待つ拉致被害者はまだ多数います。蓮池さん家族の日常生活に立ちほだかるハードルも少なくありません。拉致事件

を風化させないために、これまでの道のりを振り返るとともに、心を新たにしたいと思います。

「無関心」「無理解」の厚いカベ

拉致被害者の家族の方々が「家族会」を結成したのは1997年。同時に全国各地に支援組織ができればじめ、中央大学でも98年5月、学生やOBが「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」を発足させました。

「大学にも出来ること、出来ないことがある」と、よく言われました。そうだろうと分かってはいました。

「学生の力で何が出来るの?」。その通りです。

でも、諦めたくなかったのです。だから、立ち上がりました。

「蓮池さん一家を支援の輪で包もう」と、とまどう背中を自ら押ししました。

私たちは大学に蓮池さんの学籍回復を働きかける一方、ご両親と話し合い、中大卒の国会議員すべてに手紙を出しました。「同じ中大生が拉致されています。助けて下さ



成績表をみながら、復学した場合の履修手続きや残り単位数について、永井和之法学部長（当時）から説明を受ける蓮池さん＝2003年3月14日

い」。切々と訴えましたが、返事があったのはたった1人でした。

「白門同窓なら協力してくれるはず」というのは、甘い幻想でした。

駿河台記念館で署名活動をした際、職員にこう言われたこともあります。

「敷地の外でやれ」

「君らの政治活動に大学の名を使うなよ」

拉致事件に対する社会的認知度が低かったとはいえ、「無関心」、「無理解」の壁は厚いと感じたものでした。

「温情」ある学籍回復の決定

拉致事件が脚光を浴びるようになったのは、2002年秋の小泉純一郎首相（当時）の北朝鮮訪問からでした。9月17日の日朝首脳会談で北朝鮮は、日本人拉致を初めて認めて謝罪。10月15日、蓮池薫さんから5人の帰国が実現しました。

それまでは街頭でいくら声を枯らしても、振り向く人はまばらでした。「反北朝鮮の

右翼運動」のレッテルすら貼られました。

そうした中、中央大学関係者のサポートは本当に嬉しいことでした。特に、自らの職域や立場を超え、上司の目を盗み、そっと支えてくれた「匿名」の大学職員の方々。

そうした方々の協力なくして、救出運動はあり得ませんでした。厚く御礼申し上げます。

98年、蓮池薫さんの学籍回復の方針が決定された時、復学するための条件はこうでした。①本人の生存が確認される②日本に帰国する③復学の意思を表明する。そうすれば、中央大学として「復学を認める方向で前向きに検討する」ということでした。02年秋、小泉首相訪朝直前の9月13日、中央大学は阿部三郎理事長・総長職務代行（当時）名で緊急メッセージを發しました。「蓮池さんの復学の意思が確認されれば、学籍回復することを決定しております」そこには方針決定時にあった「方向」「前向き」「検討」といった文字はありませんでした。私たちは大学の「温情」と受け取りました。

その「温情」が、拉致という未曾有の国



拉致される直前に4ヶ月ほど通った多摩キャンパスを感慨深げに歩く蓮池さん(中央)。左は「中大生を救う会」の3代代表幹事の渡部一実さん、右は同2代代表幹事の南竜也さん=2003年3月14日

家的犯罪と戦う被害者、家族、支援者をどれほど勇気づけたことでしょう。救出運動に取り組む中大生として本当に心強く、誇りに思ったことを、今でも覚えています。

ただ、その一方で悔しく悲しい思いもしました。

「冷淡」な対応に悔しい思いも

運動を始めた98年

当時、「北朝鮮拉致疑惑日本人救済議員連盟(旧拉致議連)」には、中央大学OBの政治家も参加していました。しかし、なかには美辞麗句を並べて拉致家族の方々に近づきながら、実際は言葉と裏腹な政治家がいました。「お母さん、絶対に息子さんを取り戻してみせませ」と期待をもたせながら、「拉致」自体を否定する言動を目の当たりにしたのでした。

00年3月、日本政府は「人道支援」として

北朝鮮へのコメ支援を実施しましたが、その前月、柏崎市の蓮池さん宅を訪れたある中大OBの政治家は、ご両親に向かつてこう約束していました。「拉致に進展がない限りコメはだしません」と。

北朝鮮のウソ、日本政府の無為無策、世間の無関心、救出運動への妨害……。私たちはそんなことには慣れっこでした。でも、中大関係者の冷淡で身勝手な言動にはこたえました。家族や支援者の会合に参加するたび、こう言われました。「蓮池さんの問題があるのに、あのOBはどうなっているの?」。悔しい。情けない。恥ずかしい。皆でうつむくしかありませんでした。

全面解決に向け「心」ひとつに

10年に及ぶ救出・支援活動を通じ、同じ中央大学関係者でも拉致事件への対応に温度差があることを実感してきました。拉致事件は終わっていません。蓮池さんのご卒業を機会に、中央大学関係者がぜひ、「心」をひとつにし、拉致事件の全面解決に向けた新たな出発点にしたいと願う次第です。

◇ 蓮池薫さん拉致事件、復学・卒業までの経緯 ◇

1976年4月	蓮池薫さん本学法学部法律学科に入学。
1978年7月31日	新潟県柏崎市に帰省中、北朝鮮の工作員により、蓮池（旧姓奥土）祐木子さんと共に拉致される。（3年次）
1983年7月1日	在籍年限の8年目、消息不明のまま除籍。
1998年5月	有志の学生、OBらが蓮池さんの支援団体「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」を立ち上げる。
同 5月25日	蓮池さんのご両親（秀量さん、ハツイさん）が中央大学の内海英男理事長（当時）ら4人に学籍回復を求める請願書と拉致事件の資料を送る。
同 6月12日	法学部教授会で蓮池さんの学籍回復問題について審議。
同 6月15日	学部長会議で蓮池さんの学籍回復問題について、以下の三条件が整えば、復学を認める方向を確認・了承。 ①拉致の事実判明②本人の帰国③本人による復学の意思表示
同 6月16日	長内了法学部長（当時）が同上の事項を記者会見で発表。
2002年9月17日	小泉首相（当時）が訪朝。日朝首脳会談で北朝鮮が拉致を認め、謝罪。蓮池さん夫妻ら5人の生存が確認される。
同 10月15日	蓮池さんら5人が日本に帰国。
2003年3月14日	「中大生を救う会」の招きで、蓮池さんが拉致以来26年ぶりに中大を訪問。永井和之法学部長（当時）から復学手続きについて説明を受ける。
2004年5月22日	小泉首相（当時）2度目の訪朝。蓮池さんの2人のお子さんらが帰国。
同 8月22日	蓮池さん、中大宛てに文書「中央大学への復学のお願について」を提出、復学的意思を表示。
同 9月9日	蓮池さんの兄、透さんが中央大学駿河台記念館で金井貴嗣法学部長（当時）に面会、薫さんの復学的意思を直接伝える。
同 9月24日	法学部教授会で蓮池さん復学を審議、了承。同日付で法学部法律学科第3年次への再入学を許可し、同年度の履修登録を認める。卒業に必要な単位は76年の入学時と同様140単位。学籍番号も当時と同じ「76A11×××××」を使用。警備上の都合などから、柏崎市の自宅で在宅学修。現在の講座内容が拉致当時と異なるため、専任のアカデミックアドバイザーを置き、学修を進める。
2008年3月3日	所定の単位を修得し、卒業が決定。



金井貴嗣法学部長（当時）に蓮池さんの復学的意思を伝える兄・透さん（中央）＝04年9月9日、駿河台記念館



拉致以来26年ぶりに多摩キャンパスを訪れた蓮池さん＝03年3月14日